

ウクライナ民話の紹介 — 日本の昔話との比較 —

林 伸一

1. はじめに

ボランティア・グループの「山口の朗読屋さん」は、以下のような「ウクライナ民話」紹介のための朗読会を2022年11回行なってきた。本稿では、主な「ウクライナ民話」を紹介し、日本の昔話との比較を行う。

2. ウクライナ民話（1）「てぶくろ」

ウクライナ民話という『世界の民話27・ウクライナ』（小澤俊夫・編／関楠生・訳／ぎょうせい）が、1985年に発行されている。その中には、63の民話が350頁にわたって紹介されている。もちろんそれが全てではなく、次の表1に示すウクライナ民話として広く知られている「てぶくろ」の話は掲載されていない。絵本として発行されている話では、「狼と犬」が『セルコ』として知られている。そのほかは「貧乏神」が絵本では『びんぼうこびと』として福音館書店から出されている。

表1. ウクライナ民話「てぶくろ」の絵本（紙芝居）

No.	書名	作者	出版社・出版年	頁数・その他
1	てぶくろ ウクライナ民話	エウゲーニー・M・ラチョフ絵 内田莉莎子／訳	福音館書店 1965年11月	全17頁
2	童心社のベスト紙芝居 第7集 てぶくろ ウクライナ民話	堀尾青史・脚本 箕田美子・絵	童心社 1979年2月	全12場面
3	てぶくろ THE MITTEN	エウゲーニー・M・ラチョフ絵 内田莉莎子／訳	ラボ教育センター 1999年11月	英日CD付 英語絵本
4	てぶくろ ウクライナ民話 ＜ラチョーフ・シリーズ1＞	エウゲーニー・M・ラチョフ絵 田中 潔／訳	ネット武蔵野	全24頁（てぶくろ：14頁）ほか1話（注1）
5	てぶくろ ウクライナ民話より	たちもとみちこ作	ブロンズ新社 2005年10月	全32頁
6	ウクライナ民話 てぶくろ The Mitten	アルビン・トレッセルト再話・ヤロスラーバ絵・三木卓／訳	のら書店 2005年11月	全33頁
7	視聴覚資料「てぶくろ」（マルチメディアデイズー図書）	エウゲーニー・M・ラチョフ絵 内田莉莎子／訳	日本障害者リハビリテーション協会 2012年5月	原本：福音館書店（林欣子・朗読9分8秒）
8	すまいるママ・めいさくステップ ウクライナ民話 てぶくろ	すまいるママ著 （絵と文）	ヴィレッジブックス 2006年12月	全28頁

9	トムがてぶくろをおとしたら	ジム・エイルズワース文／バーバラ・マクリントック絵 福本友美子／訳	犀の工房（神奈川県座間市） 2018年11月	全32頁 原本は <The Mitten> USA
10	大型絵本（傑作絵本劇場） てぶくろ	M・ラチョフ絵 内 田莉莎子／訳	福音館書店 2020年1月	全15頁（48cm） 9,600円 （ロシアの絵本）
11	笑本おかしばなし3 てぶくろ	ガタロー☆マン著	誠文堂新光社 2022年2月	全58頁

（注1）他の一話は「パンと子牛ときつねとおおかみ」（8頁）が収録されている。同書は、日本図書協会選定図書・日本子どもの本研究会選定図書となっている。

2-1. ウクライナ民話の「てぶくろ」について

2-1-1. エウゲーニー・M・ラチョフの「てぶくろ」

エウゲーニー・M・ラチョフ（Evgenii Mikhailovich Rachev）の原作は1950年に出されている。

フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』や絵本の著者紹介によるとエウゲーニー・ミハイロヴィチ・ラチョフ（ロシア語：Евгений Михайлович Рачёв；ラテン文字表記：Evgenii Mikhailovich Rachev、1906年－1997年）は、ロシアの絵本作家である。ウクライナ民話に挿絵を描いた『てぶくろ』が世界的に評価されている。

ネット武蔵野のラチョーフ・シリーズでは、エウゲーニイ・ラチョーフと表記されている。

シベリアのトムスク生まれ、幼年時代をバラビンスカヤ草原の大自然の中で、鳥や動物と親しんで育った。1924年クバン美術師範学校に入学、さらに1928年からキエフ美術大学デザイン学部に入って学び、在学中から挿絵画家として活動を開始した。レーベデフやエフゲーニー・チャルーシンの動物絵本に出会ったのを機に、キエフ出版所文化美術部に入り、挿し絵を描き始めた。

1930年にキエフの出版所「クリトゥーラ」に勤め、編集者シベルスキーに子どもの本の絵について教わった。精力的に絵本制作に取り組むようになる。

1935年からモスクワ国立児童図書出版所絵画部の編集長を務め、数々のすぐれた動物絵本を生み出した。ラチョフの作品には動物が登場する民話や寓話に挿絵を描いたものが多い。

第二次世界大戦後、次々と大作を発表。動物たちに人間的性格を重ねた表現を特徴とする。ライプツィヒ国際図書展銀メダル、ロシア連邦共和国人民芸術家など国内外で多数の賞を受賞している。

1997年モスクワで亡くなった。<大型絵本（傑作絵本劇場）『てぶくろ』作者紹介等参照>

日本でラチョフの『てぶくろ』として一般に広く知られているのは、1950年版（福音館書店、1965年）であるが、ウクライナ民話集『麦の穂』のために新たに絵を描き直した1978年版（ネット武蔵野、2003年）が存在する。この両者は一見すると別人かと思うほど画風が違う。これはラチョフが1970年代初頭の前後で大きく画風を変化させたためである。

ラチョフ夫人は、1978年版を「より色彩豊かになり、それまでラチョーフの絵の特徴だった登場人物の黒い輪郭線も消えています。そのうえウクライナの伝統的な装飾模様とも、これまで以上によく合っていました」と評価する一方で、「どちらの『てぶくろ』にもそれなりのよさがあり」と1950年版と1978年版に優劣はないと言っている。（「エウゲーニ・ラチョフ（Wikipedia）」参照）

2-1-2. 福音館書店『てぶくろ』



1965年11月発行の内田莉莎子訳の福音館書店『てぶくろ』が日本における最初の絵本である。1985年の第56刷の表紙には「ウクライナ民話」とされているが、裏表紙には「ロシアの絵本」となっている。2022年2月以来、ウクライナとロシアが戦争している中で、不可解な表示である。

『世界の民話27・ウクライナ』（1985）の中にウクライナ共和国の地図が掲載されているが、ソビエト連邦の中に位置づけられており、ロシア連邦共和国と国境を接している。

1991年8月24日、ウクライナは独立を宣言し、同年末のソ連崩壊によりウクライナ独立が達成された。そもそも1917年、ロシア革命が起こり1922年、ソビエト社会主義共和国連邦（略称ソ連）が成立した。1991年12月8日、ソ連の構成国だったロシア共和国、ウクライナ共和国、ベラルーシ共和国は、「ソ連消滅と独立国家共同体設立」を宣言した（ベロヴェーシ合意）。同年12月21日、新たに8カ国が独立国家共同体への参加を宣言。1991年12月25日、ゴルバチョフがソ連大統領を辞任し、ソ連は崩壊し、ロシア連邦となった。

1985年の第56刷の裏表紙には「厚生省中央児童福祉審議会推薦・全国学校図書館協議会選定・日本図書館協会選定・大阪市立中央図書館選定」とある。以降表紙には「ウクライナ民話」とされている点は、変わらないが、裏表紙は以下の表2のように扱いが異なっている。

表2. 福音館書店『てぶくろ』の裏表紙の記述

発行年・刷数	シリーズ名	推薦・制定図書を表示
1988年・第65刷	ソビエトの絵本	厚生省中央児童福祉審議会推薦・全国学校図書館協議会選定・日本図書館協会選定・大阪市立中央図書館選定
1992年・第79刷	ソビエトの絵本	同上
1996年・第98刷	ロシアの絵本	同上
2000年・第113刷	ロシアの絵本	同上
2004年・第126刷	ロシアの絵本	同上
2008年・第144刷	ロシアの絵本	推薦・選定図書の表示なし
2021年・第171刷	ロシアの絵本	同上
2022年・第175刷	ロシアの絵本	同上

2022年10月現在、第175刷で累計330万部。

1988年の第65刷には「ソビエトの絵本」とあるのは、ソ連が存在していたから理解できるにしても、1991年12月には、ソ連が崩壊しているのだから、翌年の第79刷（1992年5月20日奥付）の裏表紙に「ソビエトの絵本」とあるのは、問題があるように思われる。

この点を福音館書店編集部にメールで問い合わせたところ、次のような回答があった。

「ご指摘のとおり1991年12月にソビエト連邦は崩壊しているため、『ロシアの絵本』とするのが正しいです。おそらくですが、当時の担当者が修正するのを失念していたため、そのままになってしまったと思われます。お詫びして訂正いたします。ご指摘ありがとうございます。

最後に、表紙では『ウクライナ民話』とあり、裏表紙では『ロシアの絵本』となっている点についてですが、裏表紙の表記は弊社でのシリーズ名です。具体的には、世界の傑作絵本を紹介するシリー

ズとして『世界傑作絵本シリーズ・〇〇〇〇の絵本』と表記しており、〇〇〇〇部分はその絵本が刊行された国を表しています。

つまり、『てぶくろ』は、ウクライナの民話を題材にした絵本ですが、刊行はロシアでされているため、ロシアの絵本と表記しています。同じようなケースとして『三びきのやぎのがらがらどん』という絵本がありますが、この作品はノルウェーの昔話を題材にしていますが、アメリカで刊行されているため、表紙に『ノルウェーの昔話』、裏表紙に『世界傑作絵本シリーズ・アメリカの絵本』と表記しています。(中略) 今後とも福音館書店をどうぞよろしくお願いいたします。このたびは、お問い合わせありがとうございました。 福音館書店編集部 (2022年12月1日受信)

ある地域の民話や昔話が、出版された現代の国籍に帰属し得るかどうかには疑問が残るが、その点は本稿の最終章で論じたい。

2-1-3. エウゲーニー・M・ラチョフの主な作品



エウゲーニー・M・ラチョフの主な作品は、『てぶくろ』内田莉莎子訳、福音館書店 (1965) ISBN 4834000508が日本での最初の作品ではなく、それより先にロシア民話『マーシャとくま』M.ブラートフ再話、内田莉莎子訳、福音館書店 (1963) ISBN 4834000117に絵を描いている。

ちなみに、同民話は、ラチョフの絵によるもの以外にも以下のような絵本が発行されている。

『アニメ絵本 マーシャとくま (講談社の翻訳絵本)』(2021年3月発行) や『マーシャとくま (世界名作おはなし絵本)』(2007年10月発行/三木卓・著/片山健・イラスト/小学館)

さらに以下のラチョフ・シリーズ1~3が出版されている。

『ウクライナ民話/ラチョフ・シリーズ1 てぶくろ』田中潔訳、ネット武蔵野 (ISBN 4944237723) 『ウクライナ民話/ラチョフ・シリーズ2 わらの牛』田中潔訳、ネット武蔵野 (ISBN 4944237731) 『ウクライナ民話/ラチョフ・シリーズ3 麦の穂』田中潔訳、ネット武蔵野 (ISBN494423774X) 詳しくは、表3を参照していただきたい。

2-1-4. のら書店の『てぶくろ』



2005年発行の『ウクライナ民話 てぶくろ The Mitten』(のら書店)は、本のカバーに「さむい真冬のロシアの森。男の子がてぶくろを、落としてしまいました」と物語の舞台が「ロシアの森」とされている。ところが「ゆかいなウクライナ民話を、リズムカルで心地よい文章と、美しく味わい深い絵で描いた絵本です」と紹介している。「ロシアの森」で展開される「ウクライナ民話」ということになる。再話したアルビン・トレッセルトと絵を描いたヤロスラーバは、ともにアメリカ生まれで、その点に無頓着であったのかもしれない。しかし、2005年の発行時点では、すでにソ連は崩壊し、ウクライナは独立を達成している。

前項の福音館書店の『てぶくろ』は、ロシア生まれのエウゲーニー・M・ラチョフが、1928年からウクライナのキエフ美術大学デザイン学部に入って学び、在学中から挿絵画家として活動を開始したことから、ウクライナの地に伝わる「てぶくろ」の話を再話し、絵をつけて絵本としたことが推測さ

れる。その場合、作者がロシア人で、再話した地がウクライナということになる。

そもそも昔話とか民話は、「むかしむかしあるところにおじいさんとおばあさんがすんでいました」という具合に、どのくらい昔なのか場所はどこなのかを特定しないところに特徴がある。そうすることによって、読者は自分のところの昔話かもしれないと思って聞き、親近感を覚えるのである。

2-1-5. すまいるママ・めいさくステップ『てぶくろ』



内表紙には「ウクライナ民話」とされているが、登場する動物としては、ハリネズミ、ウサギ、フクロウ、アナグマ、イノシシ、トラ、クマとエウゲーニー・M・ラチョフ絵の『てぶくろ』とは異なる動物が入っている。動物が多く出てくるラチョフ絵の他の作品にも、ハリネズミ、フクロウ、トラなどは、出てこない。野生のトラの生息数は、激減しているようだが、昔はウクライナにもトラが生息していたのであろうか。

2-1-6. 『トムがてぶくろをおとしたら』



トムが落とした手袋に、こごえた動物たち（リス、うさぎ、きつね、熊）が次々と入り込む。最後に小さなネズミが入ったが、手袋が破裂してしまう！ アメリカの人気絵本作家エイルズワースとマクリントックが、ウクライナ民話「てぶくろ」を新しく再話した。うさぎとリスの「ぶる、ぶる、ぶるるっ!!いれておくれよ」「だめだめ!あっちへいけ!」「おねがい!」といったやりとりが続く。本のカバーには「おなじみの昔話が、楽しい冬の物語に生まれかわりました」とあるが、絵本の最終頁には「世界中で親しまれているこの昔話は、もともとはウクライナで生まれたといわれています。ひとつのものの中に大勢の登場人物がつぎつぎにはいりこんでとうとう破裂してしまう、というモチーフは、いろいろな国の昔話に見られるものです。てぶくろは、ほうしだったり、陶器のつぼだったり、家だったり…馬の頭蓋骨というのまであります！」と民話の類型論まで記されている。

後述の『ブルガリアの民話より おじいさんのてぶくろ』の「パンパンに膨らんでぎゅうぎゅうのなかへ小さなねずみが入ったとたん、バリッバリッと破けてしまいます」という結末部分が類似している。

2-1-7. 笑本おかしばなし3『てぶ〜くろ』（ガタロー☆マン著）



『てぶ〜くろ』のどこにもウクライナ民話との断りはないが、おじいさんが落としたてぶくろにネズミ、カエル、ウサギ、狐、狼、イノシシ、熊が入り込むという設定などは、エウゲーニー・M・ラチョフ絵の『てぶくろ』そのままである。違いは、犬の代わりにおばあさんが登場して「おなら」で手袋内の住民を追い出して終わるという結末部分である。ミトウンではなく、五本指の手袋である点も他と異なる。

<第14回MOE絵本屋さん大賞2021新人賞第1位受賞『ももたろう』から続く「笑本おかしばなし」シリーズ第3弾>として本の帯がつけられており、うっかりすると『てぶ〜くろ』がMOE絵本屋さん大賞を受賞したかのような印象を与える。

ちなみに同シリーズの第2弾は『おおきなかぶ〜』であり、ロシア民話の『おおきなかぶ』（再話：

A・トルストイ／訳：内田莉沙子／画：佐藤忠良／福音館書店1966年6月発行）のパロディ絵本である。

『てぶ〜くろ』（ISBN：978-4416-52252-3）は、2022年2月28日に発行されているが、ロシアのウクライナ侵略後に出されたに於いては、全体が悪ふざけしているような印象で、パロディ本とはいえ、「ウクライナ民話」に基づく则表示しづらかったのかもしれない。ただし、ネット上では「ガタロー☆マンが今回描くお話はウクライナの民話『てぶくろ』がテーマ」と明記されている。

「初版限定! 読み聞かせ音声特典付 限定帯」が付いており、『ももたろう』『おきなかぶ〜』と同様に「読み聞かせ音声」が用意されている。声優・杉田智和と戸田恵子の朗読音声が入っている。

「笑本（えほん）おかしばなし」シリーズについて、発行元は、次のように述べている。

「悲劇は喜劇に、喜劇は超喜劇に!」をコンセプトに、悲しい結末が大嫌いで、世界中の昔話をハッピーエンドに変えちゃおうとたくらんでいるガタロー☆マンが、独自の解釈を加えた絵本シリーズ。子どもも大人も、思わず笑ってしまうこと請け合い!（一部ひらがな表記を漢字表記に変換）

果たして、昔話や民話を「思わず笑ってしまう」内容に書きかえてしまう事には、単純な肯定論ばかりは得られないであろう。「世界中の昔話をハッピーエンドに変えちゃおう」という企みが支持されるか否か大いに議論が必要な点であると思われる。

2-1-8. 『ブルガリアの民話より おじいさんのてぶくろ』



表1には示していないが、『おじいさんのてぶくろ』（ポリスラフ・ストエフ絵／寺村輝夫・文／2003学習研究社）という絵本がある。「ブルガリアの民話より」となっているが、おじいさんが手袋を落とし、ハリネズミ、うさぎ、きつね、おおかみ、くま、ねずみが入って、一緒に暮らすという筋書きは、ほとんど「ウクライナ民話」と同じである。ただし「パンパンに膨らんでぎゅうぎゅうのなかへ小さなねずみが入ったとたん、バリッバリッと破けてしまいます。破けたて手袋をそのままにして、動物たちは帰っていきます。おじいさんは落としたことに気づき戻ってきたけど手袋はなぜか破れてしまっています。おばあさんにまた新しい手袋をあんでもらいました」と結末部分の展開が「ウクライナ民話」と異なる。（初出は、学研ワールド絵本1975年1月号『おじいさんのてぶくろ』）

2-2. ウクライナの民話（2）

ウクライナの民話の絵本は、『てぶくろ』だけでなく、以下の表3に示すような絵本が出版されている。前述したエウゲーニー・M・ラチョフの作品として「わらの牛」「麦の穂」などが含まれており、彼のウクライナ民話普及に果たした役割は大きい。

次の表3の中でも「わらのうし」は、三つの出版社から発行されており、注目されている作品だと言えるだろう。

表3. ウクライナの民話（2）「わらのうし」ほか

No.	書名	作者	出版社・出版年	頁数・その他
1	わらのうし ウクライナの昔話	再話：A・ネチャー エフ 訳：田中かな子 絵：小沢良吉	フレーベル館 (キンダーおはなし えほん傑作選；19) 1976年2月	全28頁・27cm (再話者 Nechaev, Aleksandr Nikolaevich)

2	わらのうし ウクライナの昔話	作：内田 莉莎子 絵：ワレンチン・ゴル ディチューク	福音館書店 1998年09月	全32頁
3	わらの牛 ウクライナ民話 〈ラチョーフ・シリーズ3〉	絵：エヴゲーニイ・ ラチョーフ 訳：田中 潔	ネット武蔵野 2004年	全32頁・全4話 収録（注1）
4	麦の穂 ウクライナ民話 〈ラチョーフ・シリーズ2〉	絵：エヴゲーニイ・ ラチョーフ 訳：田中 潔	ネット武蔵野 2004年	全23頁・全4話 収録（注2）
5	ウクライナ民話 びんぼうこびと	再話：内田莉莎子 画：太田大八	福音館書店 （こどものとも 1971年1月号）	全26頁 （注3）
6	かものむすめ ウクライナ民話	訳：松谷さやか 絵：オリガ・ヤク トーヴィチ	福音館書店 （こどものとも463号 1994年10月）	全33頁 （注4）
7	セルコ ウクライナの昔話	文：内田莉莎子 絵：ワレンチン・ゴル ディチューク	福音館書店 2001年2月	全32頁
8	ウクライナのむかしばなし 空とぶ船とゆかいななかま	再話・絵：バレリー・ ゴルバチョフ 訳：こだまともこ	光村教育図書 2020年1月	全33頁

（注1）「わらの牛」（10頁）のほかに「コトフェイのだんな」（10頁）「きつねとかぼちゃとバイオリンとわな」（2頁）「セルコ」（8頁）の合計4話が収録されている。

（注2）「麦の穂」（10頁）のほかに「長ぐつを買いに」（6頁）「おおかみの歌」（4頁）「おおかみと子羊」（2頁）の合計4話が収録されている。

（注3）後に「こどものともコレクション（福音館書店）1998.3.1」に収録。

（注4）後に「こどものとも世界昔ばなしの旅（福音館書店）1997.11.15」に収録。

2-2-1. 絵本『わらのうし』について

フレーベル館が「キンダーおはなしえほん傑作選；19」として出した『わらのうし』が日本に紹介された絵本としては最初のものである。再話者は、A・ネチャーエフで、翻訳者は田中かな子、画家は小沢良吉である。図書館で所蔵しているところが少ない。〈以下の三冊の絵本の表紙の左端〉



ここでは福音館書店が1998年に出した『わらのうし』（内田莉莎子・作／ワレンチン・ゴルディチューク・絵）〈中央の表紙〉とネット武蔵野が2004年に出した『わらの牛』（エヴゲーニイ・ラチョーフ絵／田中潔・

訳）〈右端の表紙〉の二冊の絵本を比較してみたい。

前者の『わらのうし』は、体にタールを塗り付けるが、後者の『わらの牛』は、松やにを塗り付ける。次々に現れて、捕らえられる動物は、同じだが、前者は何も身に着けてはいないが、後者の動物

たちは、衣装を身に着けて擬人化している。前者には、お爺さんとお婆さんの姿がリアルに描かれているが、後者には、人間は絵としては描かれていない。両者に共通しているのは、きつねが雌として描かれていることとハッピーエンドで終わることである。

いずれにしる「わらのうし」は、無力で役立たずに見えるが、結果的には、体に塗り付けたタールや松やにで、クマと狼と狐を捕まえる。ユーモラスな絵による話の展開であるが、この寓話をウクライナ戦争になぞらえてみると藁の牛がウクライナ軍に見立てられ、クマや狼や狐がロシア軍となり、到底、藁の牛の側には勝ち目がない。ところが、結末は読者の予想を大きく裏切ることとなる。

柳田国男（2014）は、「人が他人との比較によって、相手の自分よりも弱く、醜く、または魯鈍なことを知ることが、もとは主要なる笑いの刺激であった。それ故に如何なる民族でも、努めて敵を笑おうとしたのである。笑いとは深い関係があったと同時に、笑われるは屈辱であり、笑うは侵害であった」と述べている。想像上の「笑うべきもの」として「わらのうし」を見ると弱そうで、魯鈍な牛の人形に過ぎない。しかし、その藁の牛も話をするし、老夫婦の役に立っている。

無価値に思える藁から、結果的には経済的に豊かになるという結末は、日本の昔話の「わらしべ長者」と似ているとも言える。

3. 「ウクライナ民話」紹介の朗読会

「山口の朗読屋さん」は、以下の表4のように「ウクライナ民話」紹介の朗読会を行ってきた。本稿では、主に絵本を中心に「ウクライナ民話」と日本の昔話との比較を行う。

表4. 「ウクライナ民話」紹介の朗読会 ()内の人数はアンケート回答者

回	日時	タイトル・内容	会場	参加人数など
1	4月25日（月） 2時～4時	「ウクライナ民話の紹介」 ハンガリー民話との比較	山口児童館（YABの 取材を受ける）	15名（アーサー・ビナー ド研究会）
2	5月23日（月） 2時～4時	「ウクライナ民話」とみ すゞの詩『空のかあさま』	ハートホーム平川	20名 （出前公演）
3	5月28日（土） 10時半～12時	「ウクライナ民話」とみ すゞの詩の朗読	みんなの久米ハウス （周南子ども食堂）	20名 （出前公演）
4	6月5日（日） 2時～4時	「ウクライナ民話」と日本 の昔話（紙芝居）朗読会	吉敷地域交流セン ター講堂	39名（30名） 自前公演
5	6月26日（日） 1時半～3時	「ウクライナ民話」の紹介 『麦の穂』＋パネル展示	国際芸術村・芸術村 フェスティバル	15人 （山口きらめき財団）
6	7月2日（土） 2時～4時	「ウクライナ民話」朗読＋ トワイライト・フォーの歌	洞春寺本堂（山口市 水の上町5-27）	32名 （19名）（注1）
7	7月18日（月） 2時～3時	ウクライナ民話『麦の穂』 みすゞ『キネマの街』から	ハートホーム平川	20名 （出前公演）
8	7月26日（火） 1時40分～ 2時40分	「ウクライナ民話」朗読＋ 参加者による絵本「てぶく ろ」のリレー朗読	山口福音教会エクレ シア緑町 （山口市緑町1-2）	22名（うち児童生徒8名、 教員4名） 詳細は後述
9	8月26日（金） 10時～11時	「ウクライナ民話」の紹介 参加者によるリレー朗読	山口育児院 （洞春寺内）	20名（うち育児院の児童 生徒10名）

10	10月23日(日) 12時～15時	家族みんなのフェスタ 「ウクライナ民話」の紹介 『麦の穂』+パネル展示	維新百年記念公園内 維新大晃アリーナ視 聴覚室	20名(うち児童生徒10名) 「山口きらめき財団」の 行事
11	10月30日(日) 11時40分～ 12時10分	家族みんなのフェスタ 「ウクライナ民話」の紹介 『麦の穂』+パネル展示	厚狭地区複合施設内 アリーナ(体育館) 実演+ブース展示	15名(うち児童生徒5名) 「山口きらめき財団」の 行事

(注1) 歌われた歌は「花はどこへ行ったの」「風に吹かれて」「ふるさと」の三曲。

3-1. 6月5日「ウクライナ民話」朗読会

前項の表4のうち、6月5日「ウクライナ民話」朗読会は、福田百合子先生(中原中也記念館名誉館長)をゲストに迎え、以下の表5のようなプログラムで吉敷地域交流センター講堂にて実施された。

表5. 2022年6月5日「ウクライナ民話」朗読会 吉敷地域交流センター プログラム

時間	題目・内容	担当
14:00～	ゼレンスキーの言葉 新聞記事 てぶくろ 絵本「びんぼうこびと」絵本「かものむすめ」	島田令子 荒井佳恵 内藤充子 西村清美 金崎清子(司会)
14:20～	解説:日本民話「貧乏神」「鶴の恩返し」との比較 (物語の類型と類似性・相違点)	福田百合子先生
14:30～	空とぶ船とゆかいなななかま	西村清美・隅野洋子
14:45～	解説:日本の昔話「竹取物語」との比較	福田百合子先生
15:00～	10分間 休憩(トイレ)	歌「ふるさと」
15:10～	絵本「わらのうし」・紙芝居「わらしべ長者」 絵本「セルコ」(狼と犬)	松重昭子・田中範明 内藤充子
15:40～	解説:「わらの牛」「わらしべ長者」比較 「セルコ」と「泣いた赤鬼」の比較	福田百合子先生
15:50～	絵本「てぶくろ」参加者体験朗読	荒井佳恵+参加者
16:00	閉会のあいさつ(次回の予告)	林 伸一(山口の朗読屋さん代表)

上の表5にある「ゼレンスキーの言葉」というのは、2022年3月23日にウクライナのゼレンスキー大統領が、オンライン形式で行なった日本の国会演説の一部である。以下の文章を読み上げた。

表6. 2022年3月23日のウクライナ・ゼレンスキー大統領の国会演説の一部

<p>2019年、私が大統領に就任して半年がたったころ、妻のオレナが目の不自由な子供のためのオーディオブックを作るプロジェクトに参加しました。このとき彼女がウクライナ語で音声を吹き込んだのが、日本のおとぎ話だったのです。私たちにとって、そして子供たちにとって、共感できる内容だったからです。遠く離れた両国ですが、私たちは似たような価値観を持っています。同じように温かい心を持っているので、実際に両国間の距離は感じません。両国の協力、そしてロシアに対するさらなる圧力によって、平和がもたらされるでしょう。</p>

3-2. 6月5日「ウクライナ民話」朗読会アンケート集計結果

参加者39名中30名のアンケートを回収(男性3名、女性24名、性別無記入3名)したので、その集計

結果を以下に示す。○の中の数字は、人数を示す。回答者の内訳は、年齢（40代①・50代②・60代⑥・70代⑬・80代⑥・90代①・無記入①）であった。

表7. 6月5日「ウクライナ民話」朗読会アンケート集計結果

1. この朗読+お話し会をどのようにお知りになりましたか？ <input checked="" type="checkbox"/> をつけてください。 はがき⑭ 知人・友人⑥ 前回の朗読会⑦ SNS① その他④（県国際交流協会など）
2. 特に印象に残ったのは、次のどれですか？ <input checked="" type="checkbox"/> をつけてください。（複数回答可） 紙芝居「てぶくろ」⑬ 貧乏こびと⑥ かもむすめ⑨ 空飛ぶ船とゆかいなななま⑫ わらのうし⑩ 紙芝居「わらしべ長者」⑥ セルコ⑨ 絵本「てぶくろ」⑦ 福田百合子先生の解説⑫ その他①ナターシャ・グジーの歌「ふるさと」 (ウクライナのふるさとをしのぶ声でした！ 男性・80代)
3. 今回の朗読+お話し会の「朗読」について、どう思いますか？ とても良かった⑫ 良かった⑤ どちらとも言えない⑩ 改善の余地あり⑩ 無記入②
4. 今回の朗読+お話し会の「福田先生のお話」について、どう思いますか？ とても良かった⑫ 良かった③ どちらとも言えない⑩ 改善の余地あり⑩

特に、印象に残った作品は、紙芝居「てぶくろ」(13人)であった。絵本の「てぶくろ」(7人)を合わせると20人の人が共感を持って、心に残った作品と言ってもいいであろう。累計330万部の絵本の力もあるだろうが、紙芝居という日本独特の表現形式で語られることにより、親近感を感じ、アンケート回答者の三分の二の支持をえていると言えるであろう。

それと朗読会の冒頭で、毎日新聞の「マリウポリ てぶくろは無事」という2022年4月17日付の記事を紹介したことが影響しているかもしれない。

ちなみに記事によるとミヤザキさんがウクライナのマリウポリにある学校の壁に絵本「てぶくろ」をモチーフに巨大な壁画を描いたが「壁画砲撃 祈りは壊せず」と壁画の大部分は無事であることが写真入りで紹介されている。

次に「ウクライナの民話」についての自由記述の内容を表8に示す。

(性別・年齢無記入の場合は、①と表示する。自由記述の無記入者は、4名であった)

表8. 6月5日朗読会「ウクライナの民話」についての自由記述

*『てぶくろ』は、50年前、一番上の子の時から読み聞かせていました。今も仕事で、高齢者（認知症）への読み聞かせで使ったりもしています。(女性・70代)
*ウクライナの民話、日本のお話との共通点を知り、身近に感じる事ができました。楽しく、そして学びの多い時間でした。ありがとうございました。(女性・60代)
*ウクライナへの関心が強いので、民話聴けて、とても感動でした。(知らない昔話ばかりでした)朗読される人の声も、声の表情、間合いの取り方もとても良くて、聴きやすい。(プロの語り手ですね!!) 絵本の絵も、心がほっこりとしましたネ。(女性・70代)
*ウクライナのことを思い、よい企画だったと思います。第二次大戦を思いながら、ウクライナの昔話おもしろかった。(女性・80代)
*とても心が温かくなりました。また、朗読の方々の声がステキでした。上手ですね！ 資料等もテーマに合わせて準備され、大変ありがたい限りです。良いですね、現況に合わせた取り組みに

感心しました。(女性・70代)

*ウクライナを身近に感じました。早く、ウクライナに平和がくることを祈ります。民話には、各国共通したのがあると感じました。(女性・70代)

*とてもおもしろく楽しい時間を今回も過ごさせて頂きました。また…都合がつけば、参加したいです。ありがとうございました。(女性・60代)

*日本の昔話とウクライナの民話が似ているということが発見だった。絵本の読み聞かせだけでなく紙芝居や一つの本を役割分担したり小道具を用意されたりと工夫がよかった。(女性・60代)

*ウクライナの絵本を通して、ウクライナを近く感じました。ふわっとした白いブラウスに赤い刺繍、ふわっとしたスカート。ウクライナの人たちに心穏やかな日々が早くおとずれますように。(女性・50代)

*ウクライナと日本と肩を組みたい。人間の心は、無限の調べ。あと心配なのは、ソ連邦信者のプーチン氏。とにかく大和の心の日本で行こう。(男性・70代)

*ウクライナ民話と日本民話の比較が大変良かった!! 福田百合子先生のお話は、素晴らしかった。単なる朗読会では終わらない素晴らしい会で、正面の映像も素晴らしかった。(男性・80代)

*ウクライナ民話と日本の民話の比較と類似点に感動した。何の気なしで読んでいても、とても奥深いものだと、次回はゆっくりと読んでみたい。(女性・60代)

*民話の絵本を通じて、他国の生活様式や文化を知ることができるのだなと思った。全体の流れの中での会員のみなさんの動きがスムーズで、無駄がなくスマートだったと思った。(女性・60代)

上の表8に「日本の昔話とウクライナの民話が似ているということが発見だった」(女性・60代)「ウクライナ民話と日本民話の比較が大変良かった!!」(男性・80代)とあるが、それは、ウクライナ民話の「かものむすめ」と日本の昔話「鶴の恩返し」などの類似点についてのことである。

以下にその類似点と相違点について明らかにしたい。

3-3. ウクライナ民話の『かものむすめ』と日本の昔話『鶴の恩返し』の比較



◀紙芝居『つるのおんがえし』(教育画劇)

ウクライナ民話の『かものむすめ』と日本の昔話『つるのおんがえし』(教育画劇、全16場面)の類似点としては、傷ついた鳥を助けた老夫婦を助けられた鳥が人間の娘の姿になり、恩返しをする点である。どちらも糸をつむぎ、機織りをする点が似ているが、相違点もある。

それは、「かものむすめ」が、巣を焼かれ、姿を見られたところで、カモにもどろうとするのだが、カモの群れが迎えに来た時に「あなたたちと一緒に行きたくないわ。私が森で足をくじいたとき、誰も待ってくれなかった。みんな飛んで行ってしまったじゃないの!」と自分の帰属グループに対して異議申し立てをし、抗議する点である。やがては、カモにもどり、老夫婦のもとを去ることになる。

日本の昔話『鶴の恩返し』のほうは、「決してのぞいてはいけない」という約束を老夫婦が破ったことを非難はするが、抗議するというよりは、悲しんで、その老夫婦のもとを去ることになる。

「恩返し」のメンタリティーは、共通しており、ゼレンスキー大統領の「遠く離れた両国ですが、

私たちは似たような価値観を持っています。同じように温かい心を持っているので、実際に両国間の距離は感じません」との言葉を裏付けていると思われる。

文化の違いとしては、『かものむすめ』は横書きで左から右へ進むのが順勝手となる。最後の場面でも老夫婦は左端にいて、右を向いている。カモの群れは、左から右へ飛び去っていく。

それに対して『つるのおんがえし』（岡上鈴江・文／輪島みなみ・画／教育画劇・制作）は題字こそ横書きであるが、裏の文章は縦書きで、右から左へと進むのが順勝手となる。最初、おじいさんが鶴を助けた場面でも、左向きのおじいさんの頭の上を鶴が右から左へと飛んでいく。最後の場面でも老夫婦は右側にいて、左を向いている。鶴は大きく羽を広げ、右から左へ飛び去っていく。

両者の絵柄は、ちょうど対照的な鏡像関係にある。

3-4. ウクライナ民話の『びんぼうこびと』と日本の昔話『びんぼうがみとふくのかみ』の比較



上は、左から福音館書店の絵本の表紙、次がその内表紙、右が童心社の紙芝居の表紙である。

ウクライナ民話の『びんぼうこびと』と日本の昔話『びんぼうがみとふくのかみ』の類似点は、真面目に働く農民が主人公で、毎日せっせと働いても生活が楽にならない点である。その原因がウクライナ民話では「びんぼうこびと」が、日本の昔話では、「びんぼうがみ」が、主人が知らないうちに家に住み着いている点である。前者は、「びんぼうこびと」を家から追い出して、生活が豊かになるのに対して、後者は「びんぼうがみ」が、「ふくのかみ」を相撲で打ち負かして、自分が福の神になり、住み着いていた家を豊かにする点が異なっている。いずれもハッピーエンドで終わる。

ウクライナ民話の絵本『びんぼうこびと』とほぼ同根の話であろうと思われる「貧乏神」という話が、小澤俊夫編『世界の民話 27 ウクライナ』の中に25番目の話として紹介されている。

日本の昔話『びんぼうがみとふくのかみ』の紙芝居は、童心社より1995年に16場面（鈴木敏子・脚本／二俣英五郎・画）で発行されている。

そのほか、ウクライナの昔話『空とぶ船とゆかいななかま』が日本の「かぐや姫」と婚姻譚として無理難題を出される点で似ている。前者は、愉快的な仲間の力を借りて、無理難題を解決し、主人公が王女と結ばれるのに対して、後者は、五人の求婚者が難題を解決できず、かぐや姫は月に帰ってしまう点が異なる。後者は、古い日本の文学作品『竹取物語』との関連性を持っている。

『空とぶ船とゆかいななかま』を英雄説話としてみることもできる。その場合、英雄説話の世界共通の型として柳田国男（1875-1962）が「凡人には十分に軽蔑されるべき者が、隠れた天運によって、後に驚くべき勇者となるのを通則としていた」（2014）と指摘している点と符合する。つまり、この物語の主人公の若者は、「世界一のまぬけ」と呼ばれていて、村人から軽蔑されていた。しかし、このまぬけな主人公が、ゆかいな仲間の特技を生かして、次々と難問を解決してゆくのである。

さらにウクライナ民話の『セルコ』は狼と犬の物語で、日本の『泣いた赤鬼』と共通する部分がある。前者は、狼があえて悪役になり、飼い主に捨てられた老犬が、再び元の飼い主に、その子の命の

恩人として養われる話である。後者は、青鬼があえて悪役になり、人間を助けた赤鬼が人間と仲良くなるチャンスをつくるという話である。似たような価値観を両者は共有していると言える。

次に「福田先生のお話」および朗読会の運営に関する自由記述を表9に示す。

表9. 6月5日「福田先生のお話」および朗読会の運営に関する自由記述

<p>*福田先生のお話について、いつも感心してお聞きするのですが、固有名詞、人名、年代等とぎれなく話される事に素晴らしい才能にびっくりです。少しでもあやかりたいと思い、いつも参加させてもらっています。(女性・70代)</p> <p>*福田百合子先生のお話が少し少ないように思いました。(◎・80代)</p> <p>*初めて参加させていただきましたが、幼かりし頃を思い出し、とてもなつかしく楽しくうれしかったです。(女性・80代)</p> <p>*楽しかった。福田先生のお話は、勉強になります。(◎・60代)</p> <p>*なごやかな雰囲気、たのしいお話がたくさん聞けました。(女性・70代・スタッフ)</p> <p>*福田先生の解説が、いつにも増して良かった。油絵や小物をご持参なさって、意気込みに溢れていらっしまった。有り難いことだと思います。(女性・80代・スタッフ)</p> <p>*福田先生の解説も視野が広がり、とても楽しい時間です。感謝です。(女性・70代)</p> <p>*福田百合子先生の優しいお声の解説が分かりやすかったです。(女性・50代)</p> <p>*福田先生のご専門のお話もお聞きできて、とても勉強になりました。(女性・60代)</p> <p>*福田先生の比較の話もユニークで、面白いものでした。はやく平和になるよう祈ります!! (女性・70代)</p> <p>*福田先生のお話がとてもよかったです。はじめて身近にお話をききました。(女性・70代)</p> <p>*福田先生の牛のお話などで、日本でもウクライナでも家畜は大切にされ、生活の糧となっていたのだなと思った。それぞれの国のユーモアややさしさみたいなものが、何となく似ている気がする。(女性・60代・スタッフ)</p> <p>*会の皆さん、とても気持ちよく活動されている様子ですばらしいと思いました。(女性・70代)</p> <p>*初めての参加です。とても専門的で質の高い内容の朗読会でした。感動の一言です。福田先生の解説が印象的でした。(専門的) また、スタッフの皆さんの朗読劇、笑いも工夫もあって楽しく、雰囲気もとてもよかったです。(女性・70代)</p> <p>*田舎にいるので、なかなか車の便がなく、不自由しています。出来得る限りの参加したいです。(女性・90代)</p>
--

3-4. 山口インターナショナルクリスチャンスクールでの「ウクライナ民話」朗読会

7月26日 山口福音教会エクレシア緑町の山口インターナショナルクリスチャンスクールにて「ウクライナ民話」朗読会を行なった。アンケート回収は、生徒8名・教員4人計12名であった。

表10. 7月26日 山口インターナショナルクリスチャンスクールでの「ウクライナ民話」朗読会

<p>1. 特に印象(いんしょう)に残ったのは、次のどれですか? (複数回答可)</p> <p>麦の穂(むぎのほ)⑤ 長靴(ながぐつ)を買いに① おおかみと子羊(こひつじ)② ひまわり(歌)④ 紙芝居「てぶくろ」⑧ びんぼうこびと④ かもものむすめ⑩ 空飛ぶ船(そらとぶふね)とゆかいなななま⑤ わらのうし③ セルコ(犬とおおかみ)⑩</p>

絵本「てぶくろ」⑦ その他①：てぶくろのリレー朗読（女・15歳）

2. きょうのろうどくについて、どう感じましたか？

とてもおもしろかった⑩ おもしろかった② あまりおもしろくなかった③
ぜんぜんおもしろくなかった④

3. ウクライナの民話（みんな）などを聞いて、どう思いましたか？（複数回答可）

もっとウクライナのことを知りたい⑤ 日本の民話や昔話と似たところがある③
ウクライナのことをしらべてみたい⑤ ウクライナがはやく平和になってほしい⑧

その他①：日本の昔話は、鬼やさるやたぬきなどが多くでると同じように、ウクライナの昔話にも動物（特にねずみやきつねなど）が多く出てきて、文化の違いを少し感じられた。（男・17歳）



＜かものむすめ⑩ セルコ（犬とおおかみ）⑩＞がゼロとなっているのは、時間の関係からプログラムをとばして朗読しなかったためである。「てぶくろ」のリレー朗読を実施したこともあるだろうが、＜紙芝居「てぶくろ」⑧・絵本「てぶくろ」⑦＞から、参加者の印象に強く残ったことがわかる。

朗読を「とてもおもしろかった⑩ おもしろかった②」と参加者に感じてもらうことができた。

ウクライナの民話（みんな）などを聞いて、「ウクライナがはやく平和になってほしい⑧」と思ってもらえるのは、うれしいことである。特に若い人たちに「もっとウクライナのことを知りたい⑤」や「ウクライナのことをしらべてみたい⑤」と思ってくれた点は、教育的効果があったと言えるだろう。

次に参加した子供たちの自由記述を表11に示す。

表11. 山口インターナショナルクリスチャンスクール「ウクライナ民話」朗読会＜子供達の記述＞

●きょうのろうどくについて、あなたの意見や感想を自由に書いてください。

*日本以外にも「てぶくろ」があったのがしらんかったです。（男・8歳）

*みなさんが声をかえたりするところや、ききてにあわせてゆっくり読むところがすごかった。ろうどくやさんの声をきいていたら、なんだかアニメのキャラクターに出てきそうな声だなと思いました。（男・12歳）

*「麦の穂」は「はたらかざる者、食うべからず」のことばがぴったりだと思った。「おおかみと子羊」は、子羊がすごい頭がいいなと思った。紙芝居「てぶくろ」は、「おお～すげ～テレビで見たことがある。公園でむかしやってたえほんやさんだあ」と思いました。絵本「てぶくろ」は人によってよみ方がちがうんだなと思いました。今日きかせてくださってありがとうございました。（女・14歳）

*前回の朗読とはまた違ったウクライナ民話のお話で、読んだことのない本などがあって、とても楽しかったです。時間の関係で聞けなかった本や他にもあるウクライナ民話のお話を読みたいなと思いましたし、聴きたいなと思いました！朗読屋さんの皆さんが、本当に朗読が上手なので、自分でもマネして読んでみようと思います。今回もステキな朗読を聞かせてくださってあり

がとうございました。またの機会も楽しみにしています!! (女・15歳)

*今日の朗読会を通して、もっとウクライナのことを調べたいなって思いました。本を読んでいるときに、はっきりしていて上手だなって思いました。(女・16歳)

*喋っている所とナレーターの所の喋り方が、少し違って引き込まれました。その作品に入り込むことができました。「麦の穂」が主だけど、自分の生活や行動を考えさせられました。朗読の中での声が入りやすい声だったので、作品に自然に入り込むことができました。声だけなのに、迫力があって引き込まれました。(女・17歳)

*スタッフの方々がとても温かくて、こちらもほっこりしました。心地よくて途中寝てしまいました…(笑)教会のイベントで、お友だちに聖書の話をする機会が多くあるので、感情の表し方や抑揚のつけかたなど、学ばせて頂くところが沢山でした。またお話お聴きしたいです! 山口の朗読屋さん加入も検討してみます(笑)!! バイオリンやギターの生演奏も是非(男・17歳)

*おひとり、おひとりの声や抑揚の付け方などが魅力的で、物語にひきこまれました!! 物語の世界観をよく伝えるために声を変えたり、ヴァイオリンを持って出てきたりしたのが、おもしろかったです!! ウクライナの絵本も日本とはまた別のファンタジー要素があって楽しかったです!!(男・17歳)

「麦の穂」は「はたらかざる者、食うべからず」のことばがぴったりだと思った(女・14歳)という感想が得られた。「麦の穂」が主だけど、自分の生活や行動を考えさせられました(女・17歳)という声も聞かれた。

ウクライナ民話の内容だけでなく、朗読の仕方に興味と関心を持ってもらったことがよかった。「みなさんが声をかえたりするところや、ききてにあわせてゆっくり読むところがすごかった。ろうどくやさんの声をきいていたら、なんだかアニメのキャラクターに出てきそうな声だなと思いました。(男・12歳)」との感想があった。最近のアニメブームのせいか声優志望の生徒が増えていると聞く。テレビやスマホなどの動画を通して朗読を聞くのも良いが、直接聞く機会も大切にしたい。

「朗読屋さんの皆さんが、本当に朗読が上手なので、自分でもマネして読んでみようと思います。今回もステキな朗読を聞かせてくださってありがとうございました。(女・15歳)」との積極的な反応もあった。「喋っている所とナレーターの所の喋り方が、少し違って引き込まれました。その作品に入り込むことができました。…声だけなのに、迫力があって引き込まれました。(女・17歳)」との肯定的な受けとめをしてくれる学生もいた。

「ヴァイオリンを持って出てきたりしたのが、おもしろかったです!!」(男・17歳)とあるのは、絵本『びんぼうこびと』の中で主人公の農夫が家族のためにバイオリンを弾く場面があり、そのための小道具として持参したのが興味を引いたようだ。「バイオリンやギターの生演奏も是非(男・17歳)」というリクエストまで出た。それは、昨年同所の訪問の際にギターの弾き語りの人が同行してくれて、朗読と歌のコラボを実施したという背景もある。

「今日の朗読会を通して、もっとウクライナのことを調べたいなって思いました」(女・16歳)という学生もいたので、もし調べるならどんな本があるか、後日探してみた。

小山哲・藤原辰史(2022)の『中学生から知りたいウクライナのこと』(ミシマ社)などという子供向けの本も出ているが、子供向けには、字が小さく写真や絵が少ないと感じる。

また、黒井文太郎監修(2022年9月8日)『13歳からのウクライナ戦争150日新聞』(宝島社)という本も出ている。同書は、写真や図版も多くてわかりやすいが、題名通り戦争場面や戦車や戦闘機など

武器関係のことが多く、毎日の戦況を報道するニュースや新聞の内容を本にしたような感じである。

さらに、国際情報ファクト研究所（2022年8月31日）『世界史に翻弄される国ウクライナ「裏面史」物語』（宝島社）という本も出ている。歴史的政治的なことに重点が置かれていて、裏面史として「死者1000万人超『ホロモドール』スターリンによる農民大虐殺」についても書かれている。「ホロモドール」の実態を映画で告発した『赤い闇』も紹介されている。現在、戦闘が激化しているドンバス地域の複雑すぎる闇を描いた映画『ドンバス』も紹介されている。この映画を観るとウクライナ戦争は、「ドンバス戦争」として2014年のクリミア併合から部分的に始まっていたことがよくわかる。

次に朗読会に参加していた教師の声を表12に示す。

表12. 山口インターナショナルクリスチャンスクールでの「ウクライナ民話」朗読会<教師の声>

<p><教師の声></p> <ul style="list-style-type: none">* 『てぶくろ』は、大好きな絵本です。ウクライナの絵本だと初めて知りました。ウクライナが身近に感じました。いつも思います。読み方って大事だなーと。みなさんの声、とてもステキでした。ありがとうございました。ぜひ、また、いらして下さい。(女性・教師)* 『空飛ぶ船とゆかいななかまたち』は、役に立たないような人も、マヌケな人も変わった人も活躍することができて、一緒にチームとして乗り越えることの大切さを知れました。皆様の声や表情を通して、絵本が好きなんだな、楽しいんだなということが伝わってきました。(女性・32歳)* 朗読は絵本の世界をその場所に創り出すエンターテインメントだと思います。朗読屋さんの朗読が、ただ読んでいるのではなく、登場人物（動物？）がそのまましゃべっているような声色と絶妙な間で、自然とその世界にひきこまれました。生徒たちにもよい学びになったと思います。朗読と朗読の間の説明や語り掛けも楽しかったです。パン屋に行ったらピロシキを探してみようと思います。本当に楽しい貴重な時間をありがとうございました。(女性・49歳)

4. まとめと今後の課題

以上、「山口の朗読屋さん」の視点から、『てぶくろ』や『わらのうし』などウクライナ民話を紹介し、2022年に実施した11回の朗読会の内容を報告した。特に、高齢者が多く参加した6月5日の朗読会と8歳から17歳までの子供たちが参加してくれた7月26日の山口インターナショナルクリスチャンスクールでの朗読会に焦点を当てて報告した。

絵本というと「大人が子どもに読むもの」「子どもが自分で読むもの」というイメージが強いが、それだけではなく、ノンフィクション作家の柳田邦男が『絵本の力』（2001）の中で言っているように「大人が自分のために読む作品としての絵本、そういう意識がとても大事なんじゃないか」と思われる。ウクライナ戦争の開始以来、大人である自分たちがあまりにもウクライナのことを知らないことに驚き、ウクライナ民話の朗読会をはじめたのであるが、テレビや新聞、インターネットなどでは知りえないことが絵本にはたくさん描かれていることを実感した。

冒頭に書いたように『世界の民話27・ウクライナ』という本には、63のウクライナ民話が収録されているが、絵本になっているものは限られている。広くウクライナ民話を知ってもらうためには「絵本の力」は大きいと実感した。さらに『てぶくろ』のように、大型絵本や紙芝居になると、さらに大きな力を発揮する。出版社には、できるだけ多くの作品を大型絵本や紙芝居にしてほしい。

2022年の年末までには終息に向かうという軍事専門家の予想に反して、ウクライナ戦争は年を越し2023年になってもいまだ収束しそうもない。ロシアの軍事侵攻から、すでに1年を経過した。

いったい日本でウクライナのために何ができるのか、考えさせられる。

特に、経済制裁はできても戦車や戦闘機などの軍事支援が憲法上できない日本としては何ができるだろうか。土着の民話の底力を信じて「絵本の力」「紙芝居の力」「朗読の力」を発揮して平和への道筋づくりへの一助となれたらよいと考える。

冒頭で触れた絵本『てぶくろ』について表紙には「ウクライナ民話」として表示されているのに、裏表紙では「ロシアの絵本」となっているのは、ウクライナ人にとっては、まさに侵略国に自分たちの土着の民話を盗み取られたような印象をもつのではないだろうか。実際にウクライナ人に聞いてみたところ、到底「ロシアの絵本」とは認められないとのことであった。出版社の方針もあるだろうが、せめて裏表紙の「ロシアの絵本」との表示をはずす配慮ができるのではないかと考える。

アーサー・ビナードが再話した『ポチャツ ポチョツ イソップ』の絵本も「カエルのくにつたわるおはなし」との副題がついている。玉川大学出版部の「世界のむかしのおはなしシリーズ」の一つで、そのほかの絵本には「インドにつたわるおはなし」「イランにつたわるおはなし」などがある。

「むかしむかし、あるところに…」伝わる民話が、現在の国境で区切られ、色分けされて伝承されることには、問題がある。場所や時を特定しない昔の人の知恵、権力者の化けの皮をはがす民話の知恵を出版社も見習うべきではないだろうか。

【参考文献】

- 内田莉沙子・再話／太田大八・絵（1971）『ウクライナ民話 びんぼうこびと』（福音館書店、全26頁）
- 内田莉沙子・作／ワレンチン・ゴルディチューク・絵（1998）『ウクライナの昔話 わらのうし』（福音館書店、全32頁）
- 内田莉沙子・文／ワレンチン・ゴルディチューク・絵（2001）『ウクライナの昔話 セルコ』（福音館書店、全32頁）
- エウゲーニー・M・ラチョフ・絵／内田莉沙子・訳（1965）『ウクライナの民話 てぶくろ』（福音館書店、全17頁）
- 岡上鈴江・文／輪島みなみ・画（1982）紙芝居『つるのおんがえし』（教育画劇、全16場面）
- 小澤俊夫編（1985）「狼と犬」「貧乏神」『世界の民話 27 ウクライナ』ぎょうせい
- 黒井文太郎監修（2022年9月8日）『13歳からのウクライナ戦争150日新聞』（宝島社）
- 国際情報ファクト研究所（2022）『世界史に翻弄される国ウクライナ「裏面史」物語』（宝島社）
- 小山哲・藤原辰史（2022）『中学生から知りたいウクライナのこと』（ミシマ社）
- 鈴木敏子・脚本／二俣英五郎・画（1995）紙芝居『びんぼうがみとふくのかみ』（童心社、全16場面）
- バレリー・ゴルバチョフ・再話・絵／こだまともこ・訳（2020）『ウクライナのむかしばなし 空とぶ船とゆかいななかま』（光村教育図書、全33頁）
- 松谷さやか・訳／オリガ・ヤクトーヴィチ・絵（1994）『ウクライナ民話 かものむすめ』（福音館書店、全33頁）
- 柳田国男（2014）『日本の昔話と伝説—民間伝承の民族学』河出書房新社
- 柳田邦男（2001）「いのちと共鳴する絵本」河合隼雄・松井直・柳田邦男著『絵本の力』（岩波書店）